

日常的な河川の利活用を促す水辺空間形成に関する研究
- 日本橋川・神田川を対象として -
A Study on Creating Waterfront spaces to Promote Dairy Utilization of Rivers
Focusing on the Nihonbashi River and Kanda River

森下優里
MORISHITA, Yuri

概要：近年、河川や水路といった水辺環境を、まちづくりに活用する動きが全国で活発になっている。本研究では、河川の水辺空間の「日常性」を定義し、日本橋川・神田川の変遷と現状の整理を行ったのち、対象河川の水辺空間の形状を「橋詰の広場・公園型」「河川沿いの歩行空間型」「河川沿いの空地・公園型」の3つに分類した。また、これらの水辺空間の内外の空間構成調査を行い、河川の水辺空間の親水性を4つに分類し、それぞれの水辺空間において、利用者の属性とアクティビティの調査を行った。その結果、水辺空間の親水性の高さに比例して、多様な利用者が滞留的かつ他者との関係性を伴うアクティビティを行う傾向があり、日常的に利活用される河川の水辺空間に必要な要件は、利用者中心の空間設計、水辺空間と外部環境の視認性、周辺エリアとの連続性の構築の3つであると明らかにした。

Summary: In recent years, there has been a nationwide surge in initiatives to utilize waterfront environments such as rivers and canals for urban development. This study defined the daily use of riverside spaces, examined the historical changes and current state of the Nihonbashi River and Kanda River, and classified the shapes of riverside spaces along these rivers into three types: “Bridgehead Plaza/Park Type,” “Riverwalk Pedestrian Space Type,” and “Riverfront Vacant Lot/Park Type.” Furthermore, we investigated the spatial composition both inside and outside these waterfront areas, categorizing the hydrophilicity of riverfront spaces into four types. I then surveyed the attributes of users and their activities within each type of waterfront space. The results revealed that the higher hydrophilicity of a riverside space, the greater the tendency for diverse users to engage in lingering activities involving interaction with others. It was clarified that the three essential requirements for riverside spaces to be utilized daily are: user-centered spatial design, visibility between the riverside space and the external environment, and the establishment of continuity with the surrounding area.

キーワード：水辺空間・日本橋川・神田川・親水性・水辺再生

Keywords: Waterfront space, Nihonbashi River, Kanda river, hydrophilic, Waterfront Revitalization

1. 研究の背景 近年、水辺環境をまちづくりに活用する動きが全国的に活発に行われている。わが国の水辺空間では、河川や水路は公共空間であるため、治水・利水上の安全を保ち、他者の河川利用に支障が無く公共性・公益性が保たれるよう、占用の許可は公的主体やその港湾関連事業者に限られていた。しかし、国民に向けて河川敷地を環境に配慮しつつ適正で多様な活用が出来るようにするため、1999年に定められた「河川占用許可準則」は、河川敷地の占用の許可に係わる基準や規則の緩和が行われてきた。このような動きに伴い、河川の水辺活用の見直しが全国的に行われるようになったのである。大阪や東京といった大都市においても、都市河川が持つ経済的・公共的価値や景観を活かし、都市の内部と河川を分断するのではなく、一体とみなしてまちづくりを行っていく動きが活発になっている。また、阪神淡路大震災を機に、災害時における水運の利用に向けて、都市河川においても舟運を運航する取り組みも行われるようになった。この

ような河川空間のオープン化は河川を管理する公的団体だけでなく民間事業者や地域住民なども含め、官民一体での水辺空間の開発が期待されており、日本橋川・神田川においては既設の水辺空間のほか、河川周辺では再開発も進められ、今後の水辺空間の利活用が注目されている。

2. 研究の目的 本研究の目的は、日本橋川・神田川を対象河川として河川の水辺空間に焦点を当て、現在の空間に至るまでの歴史的変遷と現在の河川の水辺空間内外の空間構成とその親水性の分類を明らかにし、水辺空間における利用者の属性やアクティビティの調査を行い、水辺空間の使われ方の実態を分析することで、日常的に水辺空間を利活用していくための知見を得ることである。

3. 研究の方法 本研究では、はじめに「日常に根ざした水辺空間の利活用」の定義づけをした上で、日本橋

川・神田川の水辺空間を対象に、その変遷と利活用の計画を含めた現状を整理する。その後、対象河川の水辺空間の形状や空間内外の空間構成を現地調査より明らかにし、これらを元に河川の水辺空間の親水性の分類を行う。また、親水性の分類を元に、水辺空間の利用者の属性調査・アクティビティ調査を行うことで、空間の使われ方の実態を調査・分析することで、本研究の結論を述べる。

4. 河川の水辺空間の範囲と「日常性」の定義 河川空間は、公共空間の一部と位置付けられている。本研究では、まず公共空間の定義として、出口ら(2015)¹⁾の、「土地の公有・私有に関わらず、不特定の人に公開されており、人々が入り出し、移動でき、佇むことができる営利を主目的としない空間である」と述べられているのと同様に定義する。また、本研究での河川の水辺空間とは、日本橋川・神田川の河川沿いに配置されている広場や公園・小空間を対象とする。

また、本研究内の河川の水辺空間の利活用における「日常性」は、継続的に整備された河川の水辺空間において、利用者が空間とその利用を認識し、水辺空間独自の利活用をする意識やその様子が習慣としてその地域に根付くことだと考えられる。この状態を目指した活動を「日常に根ざした河川の水辺空間の利活用」と定義する。

4-1. 水辺空間の形状分類 日本橋川・神田川内の水辺空間の形状やその数や配置を把握するため、現地調査より河川沿いのオープンスペースの形状分類を行った。その結果、河川沿いに配置されているオープンスペースは、以下の3種に分けられることが分かった。

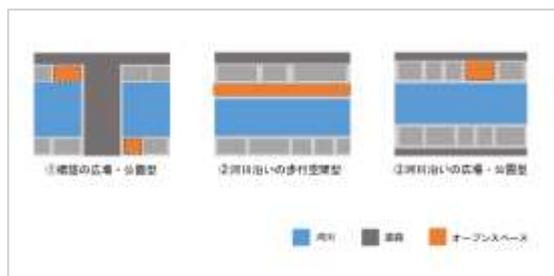


図1: 水辺空間の形状分類

- ①橋詰の空地・公園型：河川に架けられた橋の橋詰部分を、広場や公園として整備している空間。
- ②河川沿いの歩行空間型：河川と建物・自動車道路の間に、歩行者道路が整備されている空間。
- ③河川沿いの空地・公園型：河川沿いの敷地に建てられた、建物と建物の間に広場や公園を整備している空間。

これら3種のオープンスペースより、河川沿いの水辺空間として利活用出来るオープンスペースの抽出を現地調査より行った。

①橋詰の広場・公園型

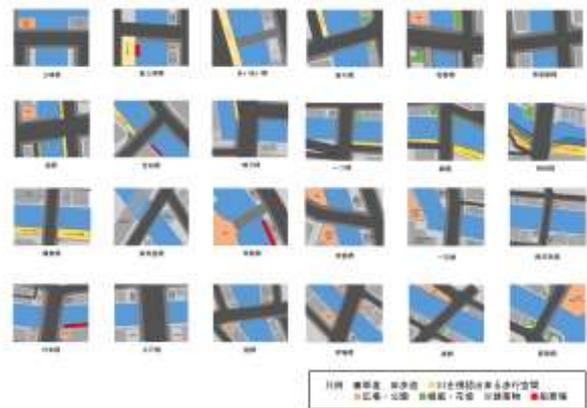


図2: 日本橋川の橋詰配置図

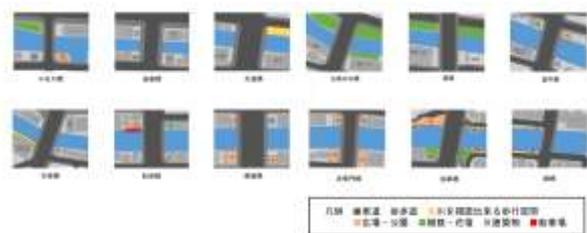


図3: 神田川の橋詰配置図

現地調査より配置図を作成し整理したところ、①橋詰の広場・公園型の水辺空間は日本橋川では16か所、神田川では11か所存在すると分かった。

②河川沿いの歩行空間型



図4: 河川沿いの歩行空間の分布図



図5: 歩行空間の様子(図中番号は図4と連動)

現地調査より、②河川沿いの歩行空間型の水辺空間は、日本橋川では10区間、神田川では4区間であると分かった。

た。また、地図上では繋がって見える区間も、その空間の様子は区間によって大きく異なっていた。

③河川沿いの広場・公園型 日本橋川では、江戸橋～鑑橋の区間に設置された「小網町児童遊園」の1箇所、神田川では後楽橋～水道橋の区間に設置された「市兵衛河岸」の1箇所のみであった。橋詰や、橋詰から歩行空間に連続する敷地は多かったが、建物と建物の間にはオープンスペースはほとんどないことが分かった。

このうち、対象河川には橋が多く架かり①橋詰の広場・公園型が多く、橋と橋の間に②河川沿いの水辺空間が部分的に形成されていること、③河川沿いの空地・公園型は配置数が2箇所と少ないことから、本研究では河川沿いの水辺空間として①橋詰の広場・公園型、②河川沿いの歩行空間を対象に調査・分析を行うこととした。次節では、これらの水辺空間の内外を詳細に調査し、水辺空間がどのような空間構成で構築されているかを明らかにする。

4-2. 水辺空間内部の空間構成調査 日本橋川・神田川の水辺空間がどのような空間構成によって成り立っているかを明らかにするため、現地調査を行い、水辺空間の規模や空間内のデザインに関して、調査指標を用いて水辺空間の構成実態を明らかにした。

①橋詰の広場・公園型 調査指標は、1)水辺空間の規模、2)着座可能な設えや什器の有無、3)設置物の有無、4)設置物の種類、5)緑化率、6)河川との境界(護岸部分)の高さ、7)境界デザインの種類の7種類とした。調査の結果、配置図と調査指標に基づく結果は以下の表のとおりであった。



図6: 日本橋川の橋詰の広場・公園型の水辺空間配置図



図7: 神田川の橋詰の広場・公園型の水辺空間配置図

表1: 橋詰の広場・公園型の内部の空間構成調査結果

調査指標	項目	該当数			割合		
		日本橋川	神田川	全体	日本橋川	神田川	全体
1) 水辺空間の規模	小規模 (2500㎡未満)	14	11	25	93.3%	100.0%	96.1%
	大規模 (2500㎡～)	1	0	1	0.66%	0%	3.84%
2) 着座可能な設えの有無	有り (イス・ベンチ)	10	0	10	66.6%	54.5%	61.5%
	有り(その他)	0	1	1	0%	9.0%	3.8%
	無し	5	4	9	33.3%	36.3%	34.6%
3) 設置物の有無	有り	15	11	26	100.0%	100.0%	100.0%
	無し	0	0	0	0%	0%	0%
4) 設置物の種類	光源	10	8	18	53.3%	72.7%	69.2%
	標識	7	8	15	46.6%	72.7%	57.6%
	遊具	4	2	6	26.6%	18.1%	23.1%
	船着場	2	1	3	13.3%	9.0%	11.5%
	その他	7	2	9	46.6%	18.1%	34.6%
5) 緑化率	ゼロ(0%)	0	0	0	0%	0%	0%
	少ない (~12.5%)	3	4	7	20.0%	36.3%	26.9%
	多い (12.6~25%)	6	5	11	40.0%	45.4%	42.3%
6) 境界高さ	低い(4m未満)	4	5	9	26.6%	45.4%	34.6%
	高い(4m以上)	11	6	17	73.3%	54.5%	65.3%

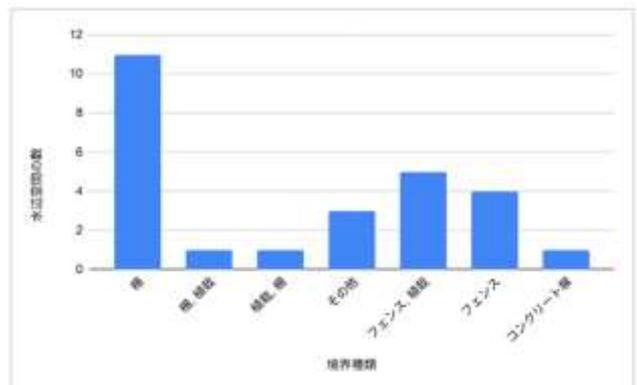


図8: 橋詰の広場・公園型の境界種類の結果

橋詰の広場・公園型の水辺空間はほとんどが小規模の空間であるが、空間内の着座できる什器やそのほかの設置物の充実さは、空間ごとに大きく異なっており、それに伴い人々の利活用の幅も異なると考えられる。また、水辺空間と河川の境界の高さや種類によっては、河川沿いに立地していても河川を視認出来ない場所もあり、同じ橋詰の立地ではあるものの、河川に開い

ている空間と閉鎖的な空間が存在すると考えられる。

②河川沿いの歩行空間型 調査指標は、歩行空間の幅員や、①橋詰の広場・公園型同様に、1) 水辺空間の規模、2) 着座可能な設えや什器の有無、3) 設置物の有無、4) 設置物の種類、5) 緑化率、6) 河川との境界(護岸部分)の高さ、7) 境界デザインの種類の7種類とした。

調査の結果、調査指標に基づく結果は以下の表のとおりになった。

表 2: 河川沿いの歩行空間型の内部の空間構成調査結果

調査指標	項目	該当数			割合		
		日本橋川	神田川	全体	日本橋川	神田川	全体
1) 水辺空間の規模	広い(3.5m以上)	4	1	5	40.0%	25.0%	35.7%
	狭い(3.5m未満)	6	3	9	60.0%	75.0%	64.2%
2) 着座可能な設えの有無	有り	3	2	5	30.0%	50.0%	35.7%
	(イス・ベンチ)						
	有り(その他)	0	0	0	0%	0%	0%
	無し	7	2	9	70.0%	50.0%	64.2%
3) 設置物の有無	有り	10	4	14	100.0%	100.0%	100.0%
	無し	0	0	0	0%	0%	0%
4) 設置物の種類	光源	10	4	14	100.0%	100.0%	100.0%
	標識	5	2	7	50.0%	50.0%	50.0%
	遊具	0	0	0	0%	0%	0%
	船着場	1	0	1	10.0%	0%	7.1%
	その他	7	2	9	70.0%	50.0%	64.2%
5) 緑化率	ゼロ(0%)	3	1	4	30.0%	25.0%	28.5%
	少ない(～12.5%)	4	2	6	40.0%	50.0%	42.8%
	多い(12.6～25%)	3	0	3	30.0%	0%	21.4%
	過多(25%～)	0	1	1	0%	25.0%	7.1%
6) 境界高さ	低い(3m未満)	2	2	4	20.0%	50.0%	28.5%
	高い(3m以上)	8	2	10	80.0%	50.0%	71.4%

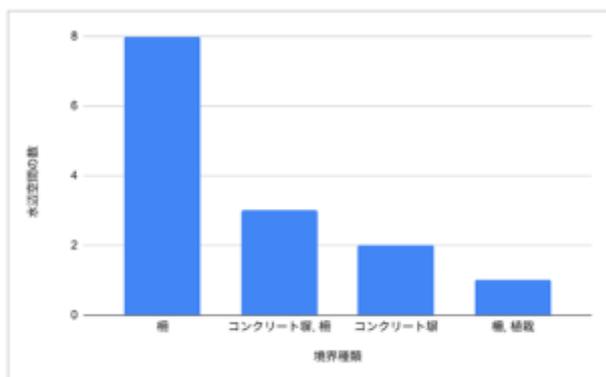


図 9: 河川沿いの歩行空間型の境界種類の結果

河川沿いの歩行空間型の水辺空間は幅員が狭いものが多く、また空間内に着座可能な什器やデザインのある水辺空間も全体の約3割であった。設置物についても橋詰の広場・公園型と比較すると割合が少なく、またパーキングメーターや駐輪場もあることから、利用者の利活用の様子は空間ごとに大きく異なると考えられる。区間によっては境界の種類によっては河川を視認出来ない空間もあり、橋詰の広場・公園型と同様に河川に開いている空間と閉鎖的な空間が存在する。

4-3. 水辺空間の外部環境の空間構成調査 日本橋川と神田川の水辺空間が、街の道路や建造物といった外部環境と、どのような空間構成で成り立っているのかを明らかにするため、4-2と同様に調査指標を作成し、現地調査より水辺空間と外部環境の空間構成を明らかにした。

①橋詰の広場・公園型 調査指標は、隣接建物の1) 建物用途、2) 建物の高さ、3) 建物からの水辺空間の視認性の3つの指標を設定した。調査の結果、調査指標に基づく結果は以下の表のとおりになった。

表 3: 橋詰の広場・公園型の外部環境の調査結果

調査指標	項目	該当数			割合		
		日本橋川	神田川	全体	日本橋川	神田川	全体
1) 建物の用途	飲食店	0	1	1	0%	9.0%	3.8%
	住宅	2	0	2	13.3%	0%	7.6%
	オフィス	4	5	9	26.6%	45.4%	34.6%
	ホテル	0	0	0	0%	0%	0%
	複合用途	5	1	6	33.3%	9.0%	23.0%
	その他	4	4	8	26.6%	36.3%	30.7%
2) 建物の高さ	低層	2	3	5	13.3%	27.2%	19.2%
	中層	1	2	3	6.6%	18.1%	11.5%
	高層	12	6	18	80.0%	54.6%	69.2%
3) 建物との視認性	分かる	2	1	3	13.3%	9.0%	11.5%
	一部分分かる	4	3	7	26.6%	27.2%	26.9%
	分からない	9	8	16	60.0%	72.7%	61.5%

隣接建物の高さは日本橋川では約9割、神田川では約7割が中高層となっており、それらの1階部分の様子が分かるものは全体の約3割であった。隣接建物との視認性がある水辺空間としては、複合用途を持つ隣接建物の一部の1階部分に飲食店を展開するものがあると分かった。このような隣接建物と水辺空間では、互いに空間的なつながりが生まれ、外部環境と水辺空間が一体した利活用が期待できると考えられる。また、全体的にみると約7割の隣接建物が水辺空間との視認性が低い。隣接建物内と水辺空間での人々の活動は互いに認識しづらく、水辺空間と隣接建物は隣あっているだけで、互いに関連が無い外部環境として隣接していると考えられる。

②河川沿いの歩行空間型 調査指標は、1) 建物用途、2) 建物の高さ、3) 建物からの水辺空間の視認性の3つの指標を設定し、水辺空間と外部環境の形態に関するものとして、4) 外部環境との接続種類を設定した。調査の結果、調査指標に基づく結果は以下の表のとおりになった。

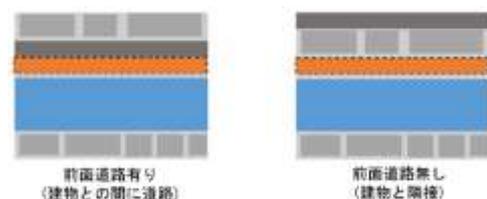


図 10: 外部環境との接続種類

表 4: 河川沿いの歩行空間型の外部環境の調査結果

調査指標	項目	該当数			割合		
		日本橋川	神田川	全体	日本橋川	神田川	全体
1) 建物の用途	飲食店	0	0	0	0%	0%	0%
	住宅	7	15	22	12.7%	27.7%	20.1%
	オフィス	22	8	30	40.0%	14.8%	27.0%
	ホテル	2	3	5	3.0%	5.0%	4.5%
	複合用途	18	13	31	32.7%	24.0%	28.4%
	その他	6	15	21	10.0%	27.2%	19.2%
2) 建物の高さ	低層	0	4	4	0%	7.4%	3.0%
	中層	5	13	18	9.0%	24.0%	16.0%
	高層	80	37	117	90.9%	68.6%	79.9%
3) 建物との視認性	分かる	3	3	6	3.4%	5.0%	5.0%
	一部分かる	8	3	11	14.0%	5.0%	10.0%
	分からない	44	48	92	76.6%	88.5%	84.4%
4) 外部環境との接続形態	前面道路有り	6	3	9	60.0%	75.0%	64.2%
	前面道路無し	4	1	5	40.0%	25.0%	35.7%

隣接・前面建物の用途は河川によってかなり分かれていることが分かる。それらの高さも、日本橋川では9割以上が高層であるが、神田川の昌平橋～万世橋の隣接建物「マーチエキュート」は遺構を活かした2階建ての低層であり、浅草橋～柳橋左岸でも中層の建物が並ぶなど、「低層」「中層」の割合が大きくなっており、それぞれの河川で異なる景観を生み出していることが分かる。しかし、建物の視認性については両河川共に約8割が河川との視認性が無い。これらの理由としては、建物の1階部分に駐車場を設けたり、前面道路を有することによってその先の隣接建物の様子が確認出来ないことが考えられる。また、日本橋川の大手町川端緑道と隣接する商業施設1階の飲食店や、神田川のマーチエキュートの1階店舗では、建物内部の様子が分かるだけでなく、テラス席の設置や出入口の確保により、水辺空間と建物の内外を行き来できるようになっていた。このように、水辺空間と外部環境である隣接・前面建物の空間的・視覚的な繋がりは、橋詰の広場・公園型同様に、空間ごとに差が出ていることが分かる。

4-4. 水辺空間の親水性分析 水辺空間と河川・外部環境の空間的な繋がりと水辺空間の滞留性について評価軸を設定し、4-2、4-3の調査結果と分析より、水辺空間の親水性を分析した。評価軸は、2にて定義した『河川の水辺空間における「日常性」とは、「継続的に整備された河川の水辺空間において、利用者が空間とその利用を認識し、水辺空間独自の利活用をする意識やその様子が習慣としてその地域に根付くこと」である』という観点より作成した。評価軸の縦軸は水辺空間と河川・外部環境の空間的な繋がりを、横軸は水辺空間内の滞留性を表している。

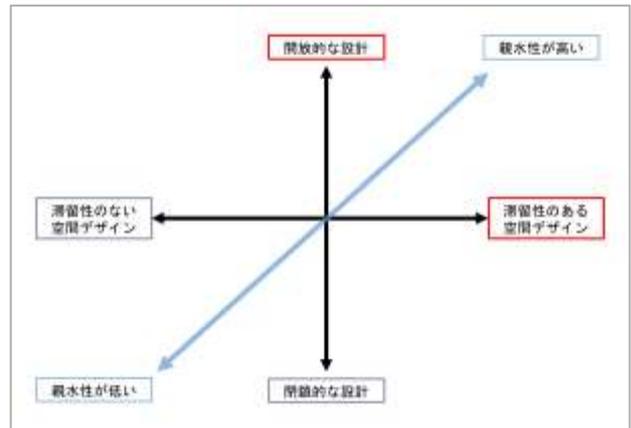


図 11: 親水性分類の評価

4-2、4-3の水辺空間内外の空間構成調査の結果より、水辺空間と河川・外部環境の空間的な繋がりに関して各水辺空間を(A)河川・外部環境を視認出来る、(B)河川のみ視認出来る、(C)外部環境のみ視認出来る、(D)河川・外部環境ともに視認できない、の4つに区分し、水辺空間の滞留性について(ア)着座可能なデザインのみ、(イ)充実している、(ウ)無機質、(エ)設置物の種類は多い、の4つに区分し、クロス集計を行った結果、以下の表のとおりになった。

表 5: 親水性分類の評価

		水辺空間の滞留性			
		(ア)着座可能なデザインのみ	(イ)充実している	(ウ)無機質	(エ)設置物の種類は多い
河川・外部環境	(A) 河川・外部環境を視認出来る	橋:3 歩:1	橋:4 歩:2	橋:1 —	橋:1 歩:1
	(B) 河川のみ視認出来る	橋:2 歩:1	橋:6 歩:2	橋:3 歩:4	橋:1 歩:1
	(C) 外部環境のみ視認出来る	—	—	—	橋:1 —
	(D) 河川・外部環境ともに視認出来ない	橋:3 歩:1	—	橋:1 歩:5	—

また、表をもとに2つの評価軸に分類したところ、各水辺空間の親水性は以下の図のように、「Ⅰ親水性が高い」「Ⅱ滞留性が優位」「Ⅲ親水性が低い」「Ⅳ開放性が優位」に分類できた。

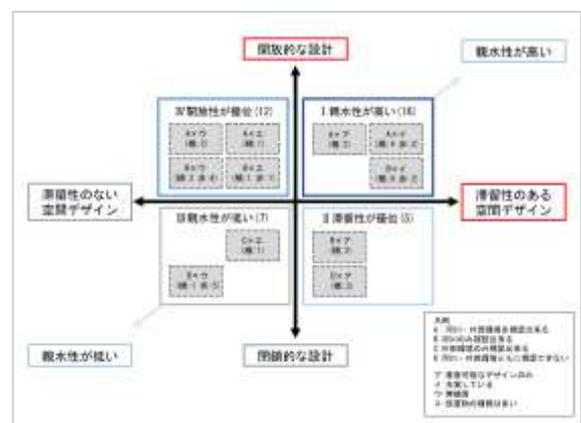


図 12: 親水性分類のゾーン分け



図 13: 親水性分類のまとめ

5. 日本橋川・神田川の水辺空間の利活用の実態

5-1. 利用者の属性調査 水辺空間がどのような人々に利用され、どのような時間に多く利用されているのか、日常時(平日、晴天時)において12時~13時、15~16時、18時~19時を対象の水辺空間に滞在し、利用者の性別と年代、服装、人数構成の項目を記録し、日本橋川・神田川の水辺空間の利用実態を把握した。

その結果、Ⅰ親水性が高い水辺空間は男女ともに利用され、幅広い年代や多様な人数構成の人々に利用されていた。Ⅱ滞留性が優位な水辺空間とⅢ親水性の低い水辺空間では、男性の利用者に偏り、女性の利用者を遠ざかっており、限定的な年代の単独利用者に利用される傾向にあった。Ⅳ開放性が優位な水辺空間では、幅広い層の利用者を集め、Ⅰ親水性が高い水辺空間ほどではないものの、複数人利用なども見られた。

これらの結果より、Ⅰ親水性の高い水辺空間と、Ⅳ開放性が優位な水辺空間は、より多くの性別や年齢の人を集める傾向にあり、またその人数構成も多様になることが分かった。一方で、Ⅲ親水性の低い水辺空間と、Ⅱ滞留性が優位な水辺空間では、利用者の層は限定的で、単独利用が多くなる傾向があると分かった。また、親水性が中程度のⅡ滞留性が優位な水辺空間とⅣ開放性が優位な水辺空間の結果から、より多くの幅広い利用者を集めるには、水辺空間の開放性が強く影響していると考えられる。

5-2. 利用者のアクティビティ調査 利用者が水辺空間をどのように利用しているかを把握し、水辺空間内で発生するアクティビティの種類とその場所、使われ方

の変化を調査することで、水辺空間の空間構成と利用者の活動にどのような関係があるかを明らかにする。調査方法は5-1と同様に水辺空間に滞在し、作成したアクティビティの指標を基に、配置図上にプロットする。なお、アクティビティ指標は、ヤングール「公共空間における人々の活動の分類」²⁾や、金那英ら³⁾(2006)、高橋ら⁴⁾(2019)の先行研究を参考に作成している。

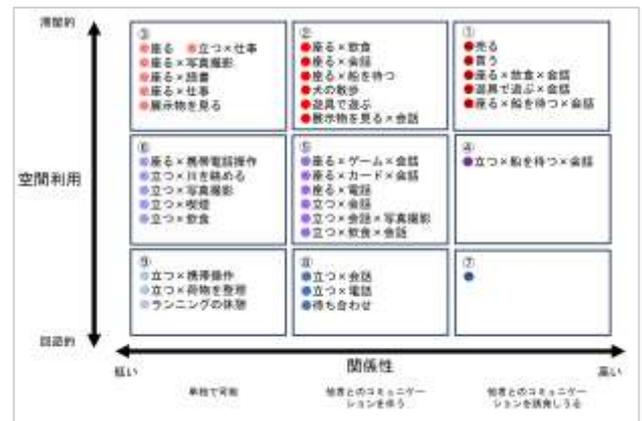


図 14: アクティビティの分類指標

調査の結果、Ⅰ親水性が高い水辺空間では、他者との関係性が中度以上かつ滞留的なアクティビティが発生しており、その種類も多く、多様化した利活用がされていると分かった。またその中でも、[TOKYO TORCH park]、[滝の広場]、[新三崎橋南東橋詰]、[大手町川端緑道]では、キッチンカーや隣接建物1Fで買った飲食物を楽しむ、広場で船を待った後、船着場で船に乗るなど、周辺と連続したアクティビティも発生していた。

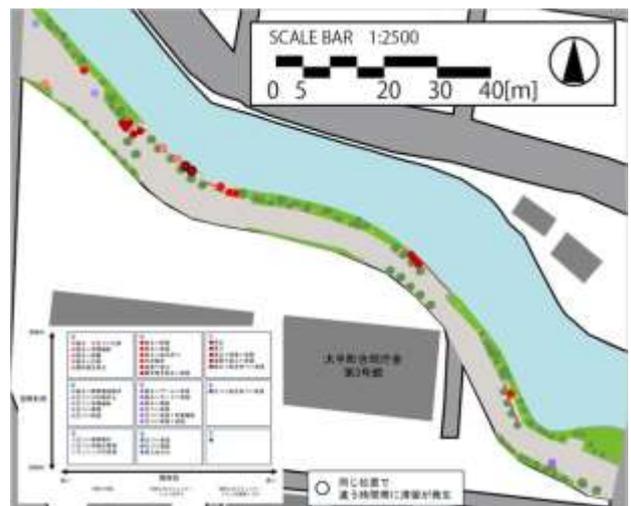


図 15: 大手町川端緑道(12時~13時)

そのアクティビティの様子が水辺空間の内外から視認出来る事から、連続して回遊的な他のアクティビティが発生し、より多様化した利活用に繋がっていると考えられる。このような水辺空間は、「日常に根ざした河川の水辺空間の利活用」がされている水辺空間と捉

えることができるだろう。

II 滞留性が優位な水辺空間では、着座可能な設えの設置による滞留性の高さととは反対に、滞留的なアクティビティは少なく、単独利用者による一時的なアクティビティがほとんどであった。このことから、滞留性のある空間デザインよりも、河川・外部環境に対して閉鎖的な設計の影響が、マイナスに強く作用すると考えられる。

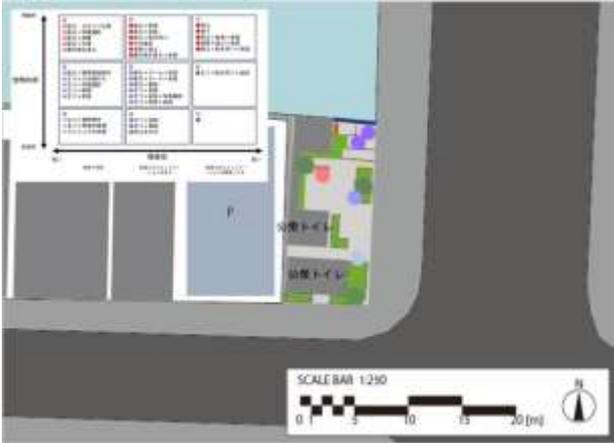


図 16: 美倉橋西児童遊園(12 時~13 時)

III 親水性の低い水辺空間では、どの時間帯でも単独利用者による回遊的な利活用に留まり、その数も少なかった。また、堀留橋北児童遊園の結果より、遊具の設置は日が出ている一定の時間帯には、滞留的なアクティビティの発生に有効であるが、一日を通した全体的な利活用の促進には不十分だと考えられる。

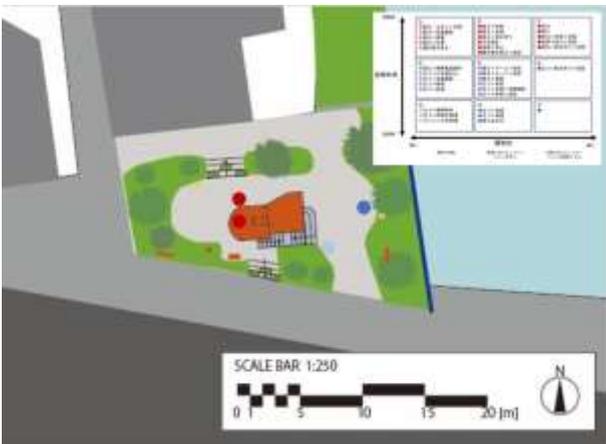


図 17: 堀留橋北児童遊園(12 時~13 時)

IV 開放性が優位な水辺空間では、滞留的なアクティビティの発生は少ないものの、他者とのコミュニケーションを伴う⑤会話×撮影や、単独利用者による⑥立つ×撮影といったアクティビティが多くなっていた。これらの要因としては、水辺空間の開放性や、橋全体や街中と連続したデザインといった、その水辺ならではの特徴的な景観が作られている点が、利用者により好意的に捉えられていると考えられる。



図 18: 元標の広場(12 時~13 時)

このように、空間の親水性に比例して、利用者のアクティビティも滞留的かつ他者との関係性を伴うものになっており、親水性が中度の II 滞留性が優位な水辺空間と、IV 開放性が優位な水辺空間の結果から、開放性が優位な水辺空間の方が、より多くの利活用に繋がることが分かった。また、I 親水性が高い水辺空間の空間ごとの結果より、滞留的なアクティビティは着座可能な設置物や、その他のテーブルや展示物などの周辺に集中しており、それらの種類が多様であるほど、様々な滞留的なアクティビティが発生し、開放的な水辺空間全体の設計と作用して、利活用の幅が広がることが分かった。多様な利活用がされる親水性が高い水辺空間では、設置物の充実さや水辺空間ならではの景観により、人々が過ごし方・利活用の方法を能動的に選択できるようになっていると明らかになった。

6. 結論 以上より、本研究における、日常的に利活用される河川の水辺空間に必要な要件として3つの結論をまとめる。

①利用者中心の空間設計

多様な利活用がされる親水性が高い水辺空間では、設置物の充実さや水辺空間ならではの景観を活かして滞留性の高い水辺空間になっていることにより、人々が過ごし方・利活用の方法を能動的に選択できるようになっていると明らかになった。また、滞留的な利活用に繋がる設置物については、遊具のように使われ方が定められているものよりも、利用者が自ら使い方や過ごし方を自由に選択できるような什器が好まれていた。利用者自身が水辺空間での利活用を選択できるよう、余白を残した利用者中心の空間設計が、水辺空間におけるアクティビティの多様性を生むと考えられる。

②水辺空間と外部環境との視認性

アクティビティの様子が空間の外部からも確認出来るような、外部環境と「見る⇔見られる」の関係が成立している水辺空間では、空間内のアクティビティや賑わいがある様子に誘発され、より多くの利用者を

得ることが出来ると分かった。また、水辺ならではの景観やアクティビティの創出のため、街中だけに開くのではなく、河川も正面と捉えて両者に開放的な水辺空間であることが必要だと考えられる。

③周辺エリアとの連続性の構築

ここでの連続性とは、デザインと物理的な空間の2つの連続性である。橋や街の景観デザインと連続性のある水辺空間では、空間内に滞留性がなくとも、周囲と一体的な独自の水辺の景観を生み出し、それらが利用者に魅力的に捉えられ、利活用に繋がること分かった。また、隣接建物といった外部環境との空間的な連続性のある水辺空間では、空間内外が繋がることによって、周囲と連続した多様なアクティビティが発生すると分かった。水辺空間が独立して整備されるのではなく、周辺エリアとの連続性を構築を考慮して整備していくことが重要だと考えられる。

また、これらの要件を単独で満たすのではなく、同時に満たすことで、それぞれの要件の効果が作用し、より日常的に活用される水辺空間となると推測する。

一方で、対象河川の水辺空間のうち、日常的な利活用がされているものは官民が連携して行われたまちづくりプロジェクトによって整備されたものが多いことから、官民連携の体制や整備に向けた資金面の確立、継続的な管理・運営を行うガバナンスには水辺空間ごとに大きな差異があり、再開発や整備に向けた地域住民との合意形成などが課題点であると考えられる。また、本研究では空間的な観点から水辺空間を分析し、特定の季節で利用実態の調査・分析を行った。今後は、経営・運営面での水辺空間の比較や、年間単位での利活用の比較を行うなど、引き続き検討が必要である。

参考文献

- 1) 出口敦・宋俊煥「公開空地等の公共空間ストック形成の潮流と変遷」日本都市計画学会, Vol. 64, No. 5, pp. 22-29, 2015 年 10 月
- 2) ヤン・ゲール 著, 北原理雄 訳「人間の街-公共空間のデザイン-」鹿島出版会, 2014 年 3 月
- 3) 金那英、畔柳昭雄(2006)『都市河川のオープンスペースに見られる地域住民の親水行動に関する研究』公益社団法人日本造園学会, ランドスケープ研究, Vol.69, No.5
- 4) 高橋亮、野原卓、三浦詩乃(2019)『都心部における公共空間としてのストリートの役割とその実態に関する研究-横浜市日本大通りにおける都市政策上の位置づけ・空間利用実態・利用者意識に着目して-』公益社団法人日本都市計画学会, 都市計画論文集, Vol.54, No.3